



だ2年にならないんですけれども、非常に今、そば通の方々が来られます。最初、「そば屋をして、じゃ誰が食べに来てくれるの。」「地域のじいちゃん、ばあちゃんたちがいるから、たまに1カ月に1回ぐらい来てここで食べてもらえばいいがね。」という話だったんですね。そうしたら、ちょっとメディアに引っかかったも

のですから、もう開店当日に70～80名来られて、そばは30食ぐらいしか打っていないんですね。非常にご迷惑をかけた記憶がございます。

こうして6次産業ができました。そばを生産者が作って、製粉して、地元で加工して、農産加工というのがありますので、たくさん打つときは農産加工のほうで打ってもらいます。そしてこの茶屋で販売する。だから、北山そばというのは今、地域外には出しておりません。

左上の方は、診療所があるものですから、この診療所が県内随一の黒字経営かなと、診療所ですね、いきさつを話せば非常に長くなりますけれども、一時的に平成15年にこの診療所をもう閉鎖しようとして議会で決めていたんですね。それを地域住民の熱意で盛り返して、盛り返した途端に、町が診療所をまた建て直してくれたんです。そして医師住宅までつくってくれたんです。それとその先生が来られた1つの感動もあるんですが、最初の先生が栃木県から来られました。そして、ずっとここにいてくれるという約束だったんですが、自分の家も診療所だったんです。それは将来的に兄貴がするから、私はもうこっちのほうでいいんだということだったんですけれども、3年契約をしまして、2年過ぎましたら、向こうの診療所が、お父さんがもうだめになって、兄さんがしないとなったんですね。困るのは向こうの患者さんです。だから、この弟の北山診療所に来てくださった先生は1年間、栃木県の診療所は土日型診療、そして北山を月曜から金曜日まで、飛行機でかけてくださいました。地域住民がこれに非常に感動したわけですね。「もう先生、そこまでせんでもいいが。」と言うんですけれども、「いや、これはもう契約だから。」と言われてですね。またその後、素晴らしい先生が来られたんですけれども、南風病院とちょっと縁戚になる方で、今でも毎週土曜日は、南風病院の先生たちが来られて、内視鏡からもう全部やってくれております。助かりますね。そしてこういう研修会もやるわけですね、右側ですね、地域住民だけです。

左の方は、これは始良・伊佐地区だったですかね、行政の方たちの視察だったんですね。

右上、鹿大の医大生が地域医療でキャンプに行きましたですね。これが住民とつながっていたんですね。稲刈りになりました。手伝いに来ます。あまり仕事にならないんですけどね、来ます。来て、手伝ってくれます。米を1俵持たせます。非常にこれは印象づけてやっているということ。それで右側ですね、こうして田んぼで食べたりとか。

下の段の左右においては、北山イチゴというのを作っております。1軒だけ。始良市でも、今はもう1軒できましたかね。これは、いちき串木野の学校を出たものですから、本人が作ると言ってやっておりますが、今、10年過ぎましたけれども、借金も大体終わりました。今からが、稼ぎ時の北山イチゴでございます。だけど、今こうして採算がとれるようになりましたので、子どもたちの体験、摘み取りとかそういうことをやっております。

左上が、これが県民の森の食堂でございます。その右側の上が県民の森のイベント広場、下のほうは客席なんですけれども、これは「しきおり」がここに行った中で、この「しきおり」の方々が県民の森の管理事務所に「何かイベントをしようよ、何かしようよ。」と話しかけて、今はもう2回済みましたが、県内外から約2,000名集まってきてくれるイベント「地域と県民の森協働桜フェスタ」でございます。これには非常にたくさんのボランティア、新人のボランティアが一番多いんですけども、ほとんど手弁当で出演もしてくれます。10時から3時まで舞台はずっとやっているんですが、全部無報酬ですね。私どもが「来てください、幾ら出しますから。」と言ったわけじゃないんですね。「こういうのをやるよ。」と言ったとき、「うちも出演させてよ。」ということになってきたわけですね。そういうことで、自然体の中でこういう祭りができ始めたということです。



また、恒例の北山桜祭りですけれども、ここになぜこうして人が集まるか、やはり地域住民の知恵なんですね。グラウンド・ゴルフをやっている老人クラブ会長さんが「午前中は遊んでいるから、あそこでグラウンド・ゴルフ大会をして、大会に参加した人達をみんな呼んで、ここで弁当をとってもらって花見をしてもら

えば。」という話。これも高齢者の知恵なんですね。発想は、また若い人たちがいろいろなことをするんですね。餅つきは、若い人たちが、言えば昔からいる地の人ですね。この人たちが「餅つきでもするが。」「そばもできたことだからそば打ちもするが。」。今、そばを打っ



ているのが東京からUターンしてきた人でございます。

田舎、田舎と言うと、こんな作業ばかりなんですね。だけれども、これが1つの生きがいじゃないでしょうけれども、自分の家の仕事の合間を縫って、みんなと一緒に奉仕作業をやっていく。全部、奉仕作業なんですね。右上は診療所の土

手をずっと払っているところですけども、上の左側の方は県道ですね、県道沿いをずっと払っております。下のほうは、やはりこれが楽しみなんですね、ばあちゃんたちもやっぱり杖をついて県道へ出てこられますよ。そしてこういうふうにご飯を一緒にするんですね。やっぱりこういう楽しみを作ってあげるといことです。



子どもたちと交流ができるようになりました。今は地域も毎週木曜日にグラウンド・ゴルフをやっております。そして、その中で子どもたちとの交流をするために、学校の先生の許可を得て、こうして1時間程度やっております。

北山で私が自治会長になった時に、校長先生は女性の先生だったんですけども、来られました。「肥後さん、もう17年度には北山は子どもは誰もいなくなるよ。もう学校は閉校か休校だよ。」と言われたんですね。調べてみると、子どもが誰もいないんですね。いないから、「じゃどうしよう。」「何とかせにゃいかんよね。」という校長先生との会話が合ったんです。「じゃ、何とかしよう。私は、地域住民にちょっとこれを説明するから。」と、説明したんです。「それなら1回集まろうよ。」という話になって、そこで集まったその晩に、「もう特認校にするか、里親にするか、何をするか。」という話をしたんですね。だけれども、前の年に薩摩川内市さんが特認校制度を敷いていました。すぐその寄田小学校に私どもは行きました。そして、平成12年度から北山小学校に特認校をしいたんですね。特認校を敷いて何とか学校を持っていました。だけどその時は地域づくりというのはあまりしていなかったんですが、

21年度、コミュニティを立ち上げて地域づくりを始めて、現在は23名の子どもが地域にいます。17年度には1人もいない予定だったんです。それが今23名。そして今年の4月に子ども会を立ち上げました。これは公民館でカレーを作っているんですが、父兄の人たちも作りますし、地域も加勢をしてくれます。この費用はどうするかというと、コミュニティ協議会で助成しているんですね。今こういうことが始まっているんですね。

七夕になりました。地域で七夕を作っているんですが、「子ども会でも1つ作ろうよ。」ということになって、子どもたちもこうして作り出した。非常に面白いのができました。



上のほうは、「そうめん流しでもしようか。」という話になったときに、地域の若手の人が「それならするが。俺がモウソウダケを切ってくつで。」と言って、モウソウダケのそうめん流し。地域の子どもたちがこうして、地域住民でこういう子どもたちを見守りながら育成しているということでございます。

十五夜綱引きは、もう私が物心ついたころから続いている伝統行事ですけど、ずっと子どもがいなかったんですね。だけれども、今年は、ほかからも来ましたので、25～26名の子どもたちが来ました。綱引きは、子どもの人たちとじいちゃんばあちゃんたちとひっぐらんごですよ。じいちゃん、ばあちゃんたちが負けましたけれども。左の下の方は、今度は大人のじいちゃん、ばあちゃんたちと子どもたちと一緒に交流、食事会ですね、こういうことをやっているわけですね。

そういうことで、事例発表的なことを終わらせていただきました。

戦前、戦中、戦後の苦難を乗り越えてこられた先輩の方々のおかげで今の日本社会、平和社会があると思うんですね。これには感謝を申し上げながら、ただ、苦難を生きていくために、そのときに出た知恵や工夫、そして、それで生活してこられた高齢者の方々の知恵袋ですね。袋にたくさん知恵が詰まっていると思うんです。それを今後、後継者に開いてあげて、分けてあげて欲しい。そういうことを今、地域づくりをやっている中で感じているところがございます。世代間交代が始まっている今、若い後継者の発想やその思いに耳を傾けていただきながら、協働的感覚で地域づくりや地域の課題解決を図ってもらいたいということです。

今、私どもの後継者に任せてしまえば、自分より年上の高齢者を使えないから、今度はま

た自分の下の人たちを使っていくんですね。それが後継から後継へと段階的に発展していくんじゃないかなということで、今の後継者が次の後継者とともに活動していく場ができていくんだということをお示ししたいと思います。

やはり、心を一つに夢おこし、考えている時チャンスがある。私はよく、床についてから、私の床の横に机を置いておって、鉛筆と白い紙を置いているんですね。うつらうつらしながらいろいろ考えたら、とってもいい発想が出てくるんです。それを朝まで待っていると忘れてしまいますので、眠っていてここで書いておくんですね。そうしたらそれがすごくためになるということですね。心を一つに夢おこし、考えている時にチャンスが来るんだと。

そして、高齢者との交流で歴史と知恵を学ぶ。高齢者の方はたくさん自分たちの考えはあるんだけど、やはり後継者とともに、一緒に考えてもらえればいいんじゃないかな。その思いというものは必ず力になります。そして「心は通じる」の信念ですね。そういうことになるんじゃないかと思います。そして、やはり住んでいる地域をまず知ること、そして把握すること、それともう1つ大事なものは、やはり後で出てきますけれども、拠点と自主財源、これが必要かなと考えます。

これはもう皆さんおわかりだと思えます。こういうことで共生協働ですね。やはり手立てをしてあげるということですね。その目的・目標というものがあると思えますが、地域の課題をまず抽出された方がいいかな。私どもも、ずっと課題を抽出しております。行政にしてもらわなきゃならんことがたくさんあるんですね。だけれども、「これをしてくれ、あれをしてくれ。」じゃ、今や行政は動きません。だから、たくさんあるんだけど、その中でできることからやっていくことで、行政が動いていくんだということです。やはりビジョンとかシナリオ、非常に難しい言葉ですけども、今、NPO法人さんがたくさん立ち上がっていますので、この方たちに専門的なことで教えてもらえるんじゃないか。そして、その地域のキーワード。私どもは「人を集める」というのが最初のキーワードでした。それから始まったのが、先ほど出たスライドで行動できたわけですね。

物語を作るということ。目的、事業、成果、課題、今後の展望、これ(スライド)は県の共生協働地域づくりの報告書の中で県のほうに作っていただきました。なるほどなと思います。やはり反省すること。私は、成果よりも課題に一番注目したわけですね。そして、これができたら今後の展望、次に何をするかという展望ですね。こういうふうに持っていきたいということでございます。

住民の合意形成、個々に光を当てる。「個々に光を当てる」は、地域住民の中に技術を持つ

た方々がたくさんおられる。大工さんもおれば左官屋さんもいる。事務屋さんもおれば電気屋さんもいる。やはりそういう方々をターゲットにして、地域づくりをやっていくんだということなんです。

そして先ほど言いました、思いは必ず力になります。なるんだけれども、そこから出す本気、本気になることが一番大事であります。それには、いろんな意見もあるでしょうけれども、いいんだということが分かりさえすれば、地域住民が納得してくだされば、必ず成果があがるんだということです。

私どもは21年度、コミュニティ協議会を立ち上げて、始良市から1銭もお金はもらっていません。助成金とかそういうのは1銭ももらっていません。鹿児島県の21年度、22年度、地域協働仕組みづくり事業で、21年度は64万円ですけども、22年度35万円、それをもらただけ。だけれども、やはりひもがついていますので、事務的にすごく大変ですね。

「じゃ、それよりもう自主財源を作ろうよ。」ということになって、今、私どもは、スターランドAIRA、野外研修センター、伝承館等ですね、それから生活改善センターの委託管理を受けて自主財源を作っております。そして、こうして草を払うときにはグループで払うわけですね。作業するときは日当を払います。けれど、受託作業を例えば100万円受けて、それが何で50万円で済むかという話です。50万円の資金が何でできるか。地元なんです。私どもは。だから、どこか茂って見苦しいところがあれば、みんなが通りがかりに奉仕作業、



ボランティアでしてくれるわけです。そして、常に払うから作業が早く終わるんですね。シルバーさんたちが受けているときは、草がこんなになってから払いました。何日もかかっていたらいいました。それを今、私どもは大体半日とかそういうことで作業を決めてしますので、そこで約50%の資金ができてきます。

会議等もこうして始めておりますが、左の優勝旗があるところですね。これにも非常に感動があります。ちびっこソフトボール大会の優勝旗を何とか捻出せにやいかんなど考えていた矢先に、先ほどちょっと紹介いただきました、県のコミュニティづくり推進協議会長賞をいただいた時に、県の講堂でこういうお話をさせていただいたんですね。その時に楽屋に行った時に、ひょこひょこ女性の方が来られたんです。その人が4～5年前まで、北山小学校

の教頭先生をしていた先生だったんですね。その先生が来られて、「出る時に何も地域にあいさつもしないで出た。悪かった。」と言って封筒をくださった。開けてみたら、優勝旗が買えました。やはり地域が動けば、こういうのが起きてくるんですね。

そういうことで、「しきおり」、そして北山茶屋、北山そばですね。こういうことで夜は猫一匹通らない道路でも、昼間はこうしてちょっとにぎわうようになったというところがございます。

だから、今、私が申し上げたいのは、何をやるんだ、これをするんだということではなくて、そういうことを考えて、何かできないかなとやっていく中で、みんなの同意ができれば、それならこれをやろうやという話の中で、地域が自然体の中でそういうふう to 動いていく。無理をしない、強制をしない、動いていく中でこういう奇跡が起きてくるんだということですね。私の頭の中にはたくさん奇跡が起きております。小さな奇跡が。だけど、それは今、住民に言えないんですね。言うてできなかったときは、もう私はちんがらっ言われますから。だから、そういうことで胸に秘めて今、やっているところです。

そして先ほど、1年目、烏帽子岳の整備をしました。今は中央駅から「あいらびゅ一号」で登山客が入ってきます。そして「しきおり」にも1カ月に1回入ってきます。そういうことでこういう奇跡が起きているんですね。これなんかも全然こっちから「来てください。」とか言うんじゃないでして、ただ、烏帽子岳が整備



できたみたいだな、女性でも登れるみたいだなという話の中で、それなら「あいらびゅ一号」で登山客を募集しようということになって、こういうことが始まってくるんですね。

小学校との関わり合いですけれども、地域住民が非常に関わっております。たくさんあるんですけども、これは運動会の準備、先ほど出た4地区がありますね、私が一人ひとりに「来てください、来てください。」と言うんじゃないでして、公民館長さんがいらっしゃるから、公民館長さんに「奉仕作業に、あるいは門つくり5名ずつな。」と言えば、20人集まるわけですよ。ただ、私が残念なのは、もう15年来ぐらいメンバーの顔が変わっていないんです。何人かは後継者が入ってきていますけれども、それが1つ残念。だから、いつまでおじさんたちに難儀をかけにやいかんたろうかいと心配をしているところでございます。

これは今、始良市になっておりますけれども、歩こう 走ろう 会、10年間誘致しました。約1,000名ですね。非常に経済効果なども出てきております。

ここなんです、下のそばを植えるところ。高齢者の方が「何言うか、ちゃんとすつたいが。」というような形で、本当に面白いですね、肥料をまく人、種をまいていく人、足でかぶせていく人ですね。

100円売り場も本当に今、売れております。もう今、野菜が足りなくて、「もうちょっとどこか買って来て出っしゃればよ。」と言われるんですが、「いや、それだけはしたくない。」と、今、みんな一生懸命何を出そうかと。だから今、この100円売り場を利用している17名の、もう80歳以上です。全員がこの10年間病気をしたことがない。本当に元気ですね。朝持ってきて出して、帰って、「また明日何か出さにかいかん。」と菜園畑に行くと、それがたくさんじゃないんですよ、2〜3個とか、2〜3袋とか、そういう1つの楽しみですね、人生の。こういう場を提供できるということが結構面白い。

そういうことですね、協働する仕組み、共有する仕組みですね、必ず奇跡が起きてくるんだということでございます。

それと、自治会と地域づくりの違い。これは私の解釈ですけれども、やはり町内会長さんとか自治会長、公民館長さんは、それぞれの自治組織の役割があるわけですね。だけれども、地域づくりというのはみんなで役割分担をする、これがあると思います。それで違いがあるんだということを言っています。それともう1つ、赤字で書いてある。どこからでも構いませんけれども、助成金、補助金は活用仕分けがあるんだということです。ひもがついているんだということですね。そういうことをちょっとお話ししたかったわけですね。

それと、共生協働で動けば必ず知恵と発想が生まれる。ご高齢の方々は知恵をたくさん袋の中に詰めていらっしゃるから、それを何とか引っ張り出さんかということですね。今の若い人たちの後継者の発想というのは、いろんな今の社会の発想というものを出示してきますので、高齢者の方は理解が難しいところもあるんですけれども、やはり「わいも、そげんとをしたちよ。」と言って怒らないで、やはりそういう若い人たちの発想に耳を傾けて迎えたいということですね。

それから、地域の地形とか地の利を生かした地域づくり。

それから、地域のことを共に考えてくれる人材ですね。やはりこれは必要だと思います。

また、ふるさとのことを思っている、地域外に出ていっている出身者の方々、こういう人たちの力もいただきたいなと考えております。



ちょっと失礼かもしれませんが、やはりリーダー的存在というものは地域性をまず知らんといかん。それから地域の地形とか環境も知らんといかん。それから、住民の1戸数1戸数の生活度、これは外に言うといかんのですよ。リーダー的人が、頭の中に入れとってもらえればいいですから。人を動かすためにはですね。そういうことが必要である。住民の経済度と言うと失礼ですけどね。

これは、何で私がこれを書いたかという、例えば、もう辞められたんですけど、うちの区長さんは牛を150頭飼っているんですよ。この人に、夕方とか朝に「地域づくりに何をやるから出てきてくいやい。」と言ったら、がられますね。だから、こういうことを考えて、やはりその人が空いている時間帯を選んで手伝ってもらおうという気遣いですね。地域住民同士でも、そういう気遣いをやはりせにゃいかんということです。それと、やはり住民の生活度、これはたくさんあると思いますが、やはり混ぜくる人やら、たくさんいらっしゃいます。だから、地域を思う心としてこういうのがあると思います。

思いは力なり、思いは見えてくるということですね。形になってきます。そして、やはり先ほど発表されたすばらしい活動をしていらっしゃる、ああいうのは必ず身になると思うんです。あのままじゃ終わりませんので、必ず身になっております。

思いは力になるということですね。それが行動へと移行していきます。そして、その思いというものはやはり周りに通じていきます、必ず。地域を自分たちが誇りに思えないで、子どもたちは帰ってくるでしょうか。自分たちが、自分の地域を誇りに思っていないと、子どもたちは帰ってこないということですよ。例えば高校を卒業して、大学を卒業して出て行った時の地域を見ているわけですね。やがて定年退職ごろになってきた時に、その地域が変わっていないと帰ってくる気がしない。これは関東、関西に出ていっている人たちが言うことです。だから、UターンとかJターンとかIターン、そして移住者ですね、こういうことを呼び込むには、その地域をやはり変えていく。あるいは、話題性を持った地域にしていくということが必要じゃないかと思います。

行政と地域の近親感。社会の変動でやはり行政職員と地域住民の近親感が薄くなっている中で、行政が考える地域像。今、あちこちでコミュニティづくりが始まっている、地域づくりが始まっているんですけども、行政が考える地域像と住民が考える地域像があるんだと。だから、これをどうしてマッチングさせるんだというところを、今まで一生懸命生きてこられたご高齢の皆さん方がそういう知恵を発してもらいたい。そしてまた、地域と行政の協働は、やはり歩調を合わせた行動の必要性を私はこの5年間で感じております。

動く地域と動かない地域。動く地域というのは必ず人材がいます。そして結いの力があります。そして文化と歴史があると思います。それから、茶飲み場所でも、飲ん方の場所でも、拠点があります。そして、自主財源を持っていらっしゃると思います。最後に、やはりその地域住民みんなが、ボランティア的習慣を持っているということですね。動きがない地域はマンネリ化現象がないかということ。「もう、おいどんはこいでよか。」という考え方ですね。それから、役員さんが名譽的役員感覚ではないかということ。でんと座っとなんもせん、そういうマンネリ現象がないかということですね。そしてまた地域住民、あるいはご高齢の方々が「もう、おいどんはこいでよか。」という、このままでいいという感覚はないか。そしてやはりその地域に、混ぜくったり、議を言ったりなどの風習はないかということですね。結いの力がなくなっていないか。

最後に、やはり動かない地域は行政機関だけを当てにしています。これはもう、今後、通用しないと思いますね。

そして空き家。これは都会でもあると思うんですが、やはり空き家になる要因として、亡くなる、その家の人が病気になる、施設に入っていき、子どもたちの所へ転居していく。その後は何か。家財道具を放置、管理者はいない、仏壇まで置いていく。そういう所は売ろうにも売れないんですね。子どもたちは「売っていいよ。」と言うんだけど、そういうのが入っていれば不動産業者もどうにもできないです。だから廃屋になるんですね。

それと、これもご高齢の方たちには失礼なことかもしれませんが、やはり廃屋とかそういうことにしないためにも、子どもたちともめないためにも、やはり遺産整理等の生前整理が必要かなと、整理をせえ、管理をせえと。行政は一生懸命、管理をせえせえと言うんですよ。田んぼでも。だけど、できないですもん。だから、子どもたちにそういう負担をかけさせないために、今から身の回り品等の整理をするということも必要かな。これをしないと地域の無縁仏になりますよということですよ。

そういうことで、いろいろとお話をさせていただきましたが、失礼なことも言ったかもしれませんが、地域づくりは地域でできることから、自分たちでできることからということを最後に、終わらせていただきます。

ありがとうございました。(拍手)